兵庫県森林動物研究センター シンポジウム

－兵庫モデルの挑戦－

野生動物の保全と管理の最前線

日時：2011 年 12 月 15 日（木）
13:30 ～ 16:20

会場：神戸市産業振興センター
「ハーバーホール」

主催：近畿農政局、兵庫県立大学、兵庫県森林動物研究センター　後援：兵庫県

プログラム

開会　13:30

話題提供

1. 兵庫から全国へ －兵庫モデルの挑戦－
林 良博（兵庫県森林動物研究センター 所長）

2. 地域で取り組む獣害対策 －成功集落の条件－
鈴木 克哉（兵庫県立大学 助教／兵庫県森林動物研究センター 研究員）

3. 住民参画型アライグマ捕獲モデルへの挑戦
横山 真弓（兵庫県立大学 准教授／兵庫県森林動物研究センター 主任研究員）

4. 兵庫県における特定鳥獣保護管理計画の考え方
坂田 宏志（兵庫県立大学 准教授／兵庫県森林動物研究センター 主任研究員）

パネルディスカッション
コーディネーター　林 良博 所長

開会　16:20

話題提供

1. 兵庫から全国へ －兵庫モデルの挑戦－

林　良博（はやし　よしひろ）
兵庫県森林動物研究センター 所長（専門分野：人と動物の関係学）
東京農業大学農学部 教授、財団法人山階鳥類研究所 所長

兵庫県森林動物研究センターは、人と野生動物の共存を目指し、両者間のあつれきを軽減するために、2007 年に兵庫県が全国に先駆けて創設した施設であり、こうした県民の期待に応える一環として、毎年研究成果を公開するシンポジウムを開催しています。

5 年間にわたって蓄積した種々のデータをもとに、シカやクマなどの生息個体数や増加率を推定することができ、科学的かつ順応的な管理計画を立案・実施することが可能となりました。また、取り組みが遅れていたアライグマ対策も、住民参画型の対策を始めることができました。さらに、「獣害に強い集落づくり」のスローガンを普及する段階から、各集落における個別・具体的な対策が展開できる段階に達しました。こうした成果をもとに、近隣府県との広域連携だけでなく、各地域の取り組みともネットワークを強化することによって、さらに精密な科学的かつ計画的な野生動物管理を推進していく考えです。

2. 地域で取り組む獣害対策　－成功集落の条件－

鈴木 克哉（すずき かつや）

兵庫県森林動物研究センター研究員（専門分野：保全社会学（ヒューマンディメンジョン））
兵庫県立大学自然・環境科学研究所 助教

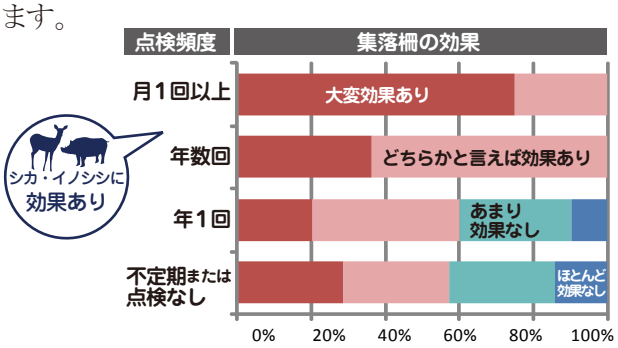
野生動物の被害防止にむけて地域住民の役割が重要視されています。野生動物の被害が発生し慢性化するのは、必ずしも個体数の増加だけが原因となっているわけではなく、集落側に野生動物を誘引する環境があることも原因とされています。

地域で取り組む獣害対策とその効果

最近では、野生動物対策を行政まかせにするのではなく、地域住民自らが主体的に被害対策のための知識を学習したうえで、適切な防護柵の設置・維持管理を行ったり、放任しているカキやクリの木や放棄野菜などの誘引物を集落全体で管理したり、野生動物にとって出没しづらい環境へと整備を行うなどの取り組みが各地で進められています。また、このような集落が主体となった取り組みが獣害の軽減に有効であることも明らかになってきました。

事例１ 柵の点検頻度とシカ・イノシシへの効果

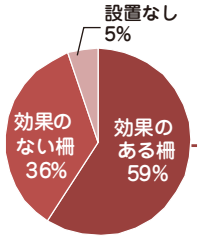
防護柵の点検・補修体制がしっかりしている集落ではシカ・イノシシに対して高い効果が得られています。



集落柵の点検頻度と効果の関係
（H21防護柵総点検結果より）

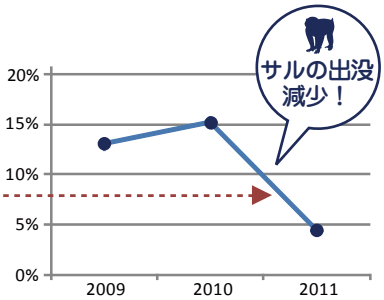
事例２ 適切な柵の設置率とサルの出没

ある集落で適切なサル用電気柵の設置率を高めた結果、その集落へのサルの出没率が大幅に低下しました。



2011 年の適正柵設置率

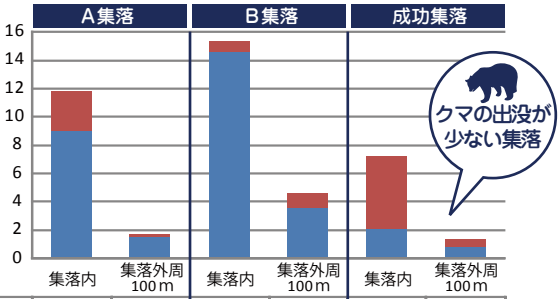
この集落では2009~2010年にかけて町事業により適切な柵が普及した。



集落へのサルの出没率

事例３ 集落内の柿の管理とクマの出没

集落内の柿の木の本数（密度）を調査した結果、クマの出没数を低く抑えている集落では、伐採や対策によりクマが利用できる柿の木の本数を少なくしていることが分かりました。



	A集落 集落内	A集落 集落外周100m	B集落 集落内	B集落 集落外周100m	成功集落 集落内	成功集落 集落外周100m
対策あり	2.8	0.2	0.7	1.1	5.2	0.5
対策なし	9.0	1.5	14.6	3.5	2.1	0.8

柿の木の対策密度（本／ha）

成功集落の条件を探る

獣害が深刻な中山間地では、森林に囲まれた地形や高齢化の進行など、地理的にも社会的にも獣害対策が困難な条件もありますが、住民の方が少しずつ継続的に取り組んできた結果、獣害をうまく防止している集落は少なくありません。この報告では、獣害対策に熱心な集落の取り組み事例から、地域の獣害対策を成功に導くポイントを整理し、ご紹介します。

3. 住民参画型アライグマ捕獲モデルへの挑戦

横山　真弓（よこやま まゆみ）

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員（専門分野：危機管理学）
兵庫県立大学自然・環境科学研究所 准教授

アライグマによる深刻な被害の現状

兵庫県では、1990 年ごろよりアライグマの生息域が急激に拡大し、農作物被害だけでなく、人家侵入による家屋の破壊などの被害が深刻化しました。さらに 2011 年には、イヌや人に噛みつく人身事故まで起こりました。そのほか、アライグマは鳥インフルエンザに感染することが確認されるなど、生態系に及ぼす影響も大きいことが指摘されています。

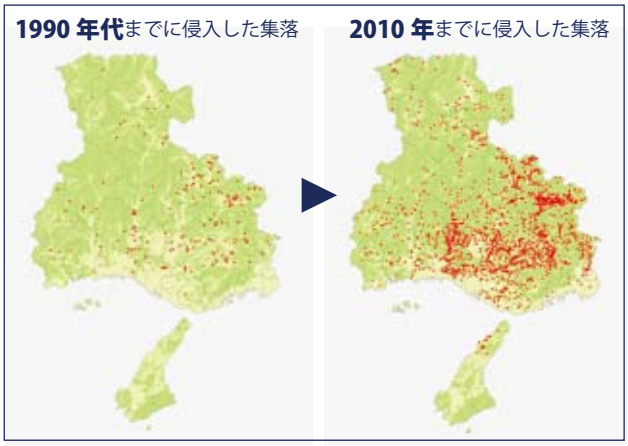


図 1. アライグマの侵入年（鳥獣害アンケートによる推定）

兵庫県における対策

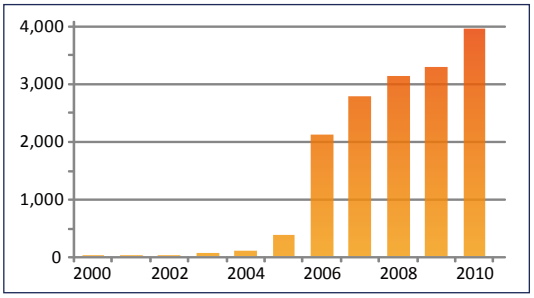


図 2. 兵庫県におけるアライグマの捕獲数の推移

兵庫県では、外来生物法に基づきアライグマ防除指針を策定、この指針に基づいて市町は、防除計画を策定し被害防除にあたっています。これにより、捕獲数は 2010 年に約 4000 頭に達しました。残念ながら、個体数の減少は見られず、生息域も急激に拡大しています。兵庫県ではシカやイノシシの個体数増加により被害が深刻な状況にあり、行政と狩猟者による捕獲が精力的に行われていますが、アライグマの捕獲までは十分とは言えないのが現状です。

市町の取り組み

近年、市街地を中心に、アライグマによる人家侵入や農作物被害が急増しているある市では、防除計画に住民が捕獲に参画するための仕組みを明記するようになりました。狩猟免許を有さない住民でも、捕獲従事者講習会を受講した良識ある住民を捕獲者として登録するという仕組みです。その市では初年度の講習会に約 600 人の市民が受講し、現在の登録者数は約 750 名のとなり、被害の深刻さが改めて示されています。

アライグマの捕獲については、知識だけでなく、実際に捕獲するための技術へのニーズも高まりました。森林動物研究センターは、住民の協力を得ながら捕獲調査を進めていましたが、ある集落では、捕獲への関心が高まり、住民によって捕獲隊が結成され、約 10 名のメンバーで捕獲のための取り組みが始まりました。

図 3. 外来生物捕獲従事者講習会

住民参画型のアライグマ排除モデルの取り組み

この捕獲隊と森林動物研究センターは、この集落からアライグマを排除するため、被害の有無にかかわらず、年間を通じた捕獲を始めています。住民参画型の捕獲にあたっては、「生息・被害状況の情報収集－モニタリング調査－ワナ設置－見周り―餌交換－ワナの位置の再検討」など住民が捕獲するためのスキームをつくり、試行錯誤を重ねています。現在は、住民が毎日身近な生活環境において、生息状況や捕獲状況を監視しながら、捕獲努力を続ける体制が構築されています。これにより、捕獲隊以外の住民の意識も高まり、生息・被害情報が 1 か所に集約され、機動力のある地域住民による速やかな対応が可能となってきています。これらの捕獲のデータは、年間の捕獲効率や季節による捕獲の適地、捕獲個体の特性など捕獲の効率性や根絶のためのノウハウに活かしていく予定です。

4. 兵庫県における特定鳥獣保護管理計画の考え方

坂田 宏志（さかた ひろし）

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員（専門分野：個体群生態学（個体数管理））
兵庫県立大学自然・環境科学研究所 准教授

特定鳥獣保護管理計画とは

野生動物の保全と管理の課題は、時代や地域によって様々で、被害や生息の状況に応じた適切な対応が必要です。都道府県が、その方針を定める計画の1つが特定鳥獣保護管理計画です。兵庫県では、シカ・クマ・サル・イノシシの 4 種について策定しており、いずれも被害の軽減や防止と健全な個体群の維持による人と野生動物の調和のとれた共存が目的です。今年度は、来年度からの5年間の計画の見直しをする年になっています。

兵庫県では、森林動物研究センターが行う生息や被害の状況などの調査結果をもとに、県民の皆様や関係機関の意見をふまえて、目標設定や方策決定、経過の評価、計画の見直しなどを行うこととしています。自然環境の実態把握や予測には困難を伴いますが、現状をできるかぎり客観的に分析し、その時点で可能な最善の手段を講じるための努力を続けています。

検討中の特定鳥獣保護管理計画の概要

平成 23 年 11 月末時点での検討案の概要を、以下にお示しします。具体的な計画案は、今月下旬から平成 24 年 1 月を目処に公表し、パブリックコメントを募集する予定ですので、ご興味のある方は兵庫県のホームページをご覧ください。

第 4 期シカ保護管理計画（案）

目標
- 農業被害の減少
- 自然植生の衰退阻止

現状
- 生息密度は低下しておらず、農林業被害は再び増加、自然植生が衰退

方策
- **生息密度の低減**
  規制緩和措置、捕獲拡大対策
- **被害対策への取り組みの推進**
  被害防止対策等

第 3 期ツキノワグマ保護管理計画（案）

目標
- 人の生活圏への出没防止
- 人身被害ゼロ
- 推定生息数 400 頭以上の維持

現状
- 生息数は増加
- 生活被害や精神被害は、より深刻に

方策
- **推定生息数に応じた方針の設定**
  出没対応基準、狩猟の規制、被害防除対策等

第 2 期ニホンザル保護管理計画（案）

目標
- 農業被害･生活被害の減少と人身被害防止
- 適切な生息頭数の維持

現状
- 群れが少なく絶滅のおそれがある一方で、生活被害や精神被害が深刻

方策
- **各群の個体数に対応した方針の設定**
- **目標達成のための具体的方策**
  防護柵や追払等の被害対策、問題個体を識別した捕獲

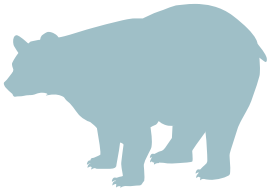
第 2 期イノシシ保護管理計画（案）

目標
- 農業被害の減少
- 人身被害の防止

現状
- 捕獲拡大や被害対策を実施しているが、農業被害は横ばい又は増加傾向

方策
- **被害対策への取り組みの推進**
- **生息密度の低減　規制緩和措置**

パネルディスカッション



皆様に記入していただいた質問票をもとに進めてまいります。
話題提供を行った、森林動物研究センター研究員による討論を行います。

コーディネーター　林 良博（兵庫県森林動物研究センター 所長）

お知らせ

森林動物研究センター　施設公開

森林動物研究センターでは、毎年夏休み期間中に施設の一般公開と研究成果の発表会を開催しています。なお、詳細が決まりましたら、当センターのホームページなどに、ご案内いたしますので、是非ともお越しください。

MEMO

兵庫県
森林動物研究センター
Wildlife Management Research Center, Hyogo

〒669-3842 丹波市青垣町沢野 940
TEL : 0795-80-5500
FAX : 0795-80-5506
URL : http://www.wmi-hyogo.jp/